

新開遺跡発掘調査の成果

九州歴史資料館



新開遺跡の概要

九州歴史資料館では、浮羽バイパスの建設に先立って、平成 30 年 6 月から平成 31 年 3 月にかけて、道路予定地内で見つかった新開遺跡（久留米市田主丸町豊城）の発掘調査を行いました。調査の結果、地表下に 2 面にわたって人々の活動の痕跡が残されていたことがわかりました。これら 2 つの層（上の層：2p、下の層：3p）からは、弥生時代の中頃（約 2100 年前）から奈良時代（約 1300 年前）にかけての^{たてあなじゅうきょあと}竪穴住居跡（当時の家）や^{ほったてばしらたてものあと}掘立柱建物跡（当時の家や倉庫）、土坑（大きな穴）など人々の生活の痕跡が見つかりました。これらの遺構からは、弥生土器や磨製石器、^{はじき}土師器、^{すえき}須恵器などが見つかりました。

これらの成果は過去の人々の活動の実態を示すもので、当時の田主丸地域の状況を考えるうえで重要な情報であるということが出来ます。

最後に、地元のみなさまのご協力とご厚意のおかげで、このような重要な発掘成果を上げることができました。感謝申し上げます。

【担当】 九州歴史資料館 文化財調査室

坂元雄紀・梶佐古幸謙

TEL 0942-75-9575



14 号住居から見つかったカマドの跡

1 面目の 14 号竪穴住居跡から出土したカマドの跡です。カマドは、古墳時代に韓半島の人々によってもたらされました。遺跡ではカマドの土台部分しか残りませんが、写真中央の石（支脚）の周りが赤く焼け、調理に使用されていたと考えられます。新開遺跡では、このようなカマドが付設された住居跡が多く見つっています。



10 号土坑から見つかった土器

2 面目の 10 号土坑とそこから出土した弥生土器です。土器は数個体がまとめて出土しており、おそらく壊れて使えなくなった土器を捨てるための穴だったと考えられます。

1 面目 古墳時代～古代にかけての生活面（6～8世紀頃）…地表下 60 cm位

掘立柱建物跡の柱の痕跡



黄色っぽく縦に細長い部分が元々柱が立っていた部分です。

14号竪穴住居跡



より後の時代の穴に壊されている部分もありますが、四角の大きな穴が住居の跡です。



13号竪穴住居跡

四角の大きな穴が住居の跡です。奥にカマドがあります。住居の中の4つの小さな穴に住居の柱を埋めて立てたと考えられます。

2 面目 弥生時代中頃の生活面（前1世紀頃）…地表下 120 cm位

9号土坑



捨てられた土器がまとまって発見されました。

穀物が入っていた壺



地形が低くなった部分に捨てられていた壺の中に炭化した穀物が含まれていました。



壺の中から見つかった穀物



※黒い粒が出土した穀物です。

23号竪穴住居跡



四角の大きな穴が住居跡です。この時代は丸い形の住居の方が多く、四角形はやや珍しいです。

23号住居跡から見つかった炉の跡



左下の赤い部分が火を受けて変色し固まった部分です。黒いのは燃えてできた炭です。